

しまう。

十二月八日は第二次世界大戦の火蓋が切られた日だが、今となつてはいやな思い出の日でもある。  
敗戦の年にうまれた純戦後派の長男もことは大学生となったが、戦いゆえに味わった親たちの当時の暗い青春の感慨も、遠い映画や小説のひとことましか受けてつてくれているまい。さしてこそ私たちは結婚二十年を迎える。戦争もたんなりの年の正月、見合いから挙式までわずか二週間といふあつたのだ……。

その前年、私は神戸から親戚の寺に空襲をきけ、嫁ぐ目のために整えられていた荷物もともに疎開してきた。

秋も盛りで、ひとり木葉の駅におりたつた私の目につく印象づけたのは深くすんだ空に映える枝もたわな桶の雲と黄金色の田んぼであった。「ここにはまだ平和が残っている」ほつと息をすいこんだあの日の思いは、いまも忘れない。

寺では一月十五日のご正忌はお正月より大事な行事である。その日も朝から参詣人で賑い、広い台所には白い湯気と舞りたちも働く人びとの熱気がこもり、並べられた黒い膳に精進料理がつきつき盛り盛られてゆく。

食物も乏しい都合いのくらしとの違いに複雑な思いを味わっていたが、こんなとき夫が私をみにひとりやってきた。

カツカツと長靴をならし、大股に近づいてきた若い中尉の颯爽とした姿に胸はさわいだ。夫も翌日すぐ仲人のもとに結婚の申込みをしたそうだ。

## 北から南へ

田中典次

先年、北海道から鹿児島まで、北海道産の馬(産産子)で、日本を縦断しようという同志社大学の学生が二人やってきた。私は先輩風を吹かせたくなって一夜私の家に泊りなさいよと進言した。

彼らがやってきた時、馬の小さいに驚いた。

女房は自分の子供でも久しぶりに来られる様に、うきうきした調子

当した、あの面影。そして翌朝、私も愛馬に乗って峠まで見送つたが、あの首の鈴の音——今もはっきりと思い浮んでくる。

今度は又、北海道谷神から鹿児島佐多岬まで——文字通り、日本の最北端から最南端までを視察するスネでテラテラ歩いて、三千百軒を突かしやうという男がやってきた。彼はただ歩くだけでなく、社会福祉施設を訪問して気の毒な人達に温かい愛情をそそいだ。社会問題の研究が彼の一生の仕事なのであろう。彼も又、同志社大学の学生で半年以上を脚力突破に要する為に卒業を一年おくらして断行した訳である。

彼は学生らしく大学生との交換も勿論忘れなかった。彼の語で印象に残った事は、靴が一カ月位しかもたない話。誠に意外な話だが靴の底はどうもないが他の部分が破損するという。彼は大いに足を大事にして歩いたかと思つたら九州に入ってハダシで歩く事も試みたという。無茶な話だが、人間の体の強さの限界をどことどこまでぶちつけて見たかだったという。

松橋の療養園はどまごちり、そして親切に話の相手をしてくれた所はないと喜んだが、そこで記者の質問に答えた彼の一言はまさに頂門の一針であった。

「気の毒な子供にはなにも責任はないですね。責任はすべて親にあるんですね。私はまだ子供を持たないから判らないけど

サービス過剰という言葉がある。

親切の押し売り、ほぼ相似た内容のものだと思いが、いずれにせよ受け身の方としては有難迷惑という場合が多い。人によつて個人差もあるが、少くとも私にとつては過ぎたるは及ばざる以上は解らない。

サービスといふ親切といふ、いずれも先方は好意であるだけに、腹を立てるわけにもいかず、それがまた内攻していつそ不快感をもり上げる、困ったものである。例はいくらもあるが、いつも私の感じる代表的な二三を挙げよう。

先ず第一が買い物、いくつかの買い物がある場合、わたしはち

ところのその夜、母から速達をうけとった。家でも縁談がきまるとうだからすぐ帰れというので、先方のご本人にまでお会してきた。汽車の切符もたやすく買えぬし、空襲の危機をおかしてまで帰つても心にそまぬ人ならと思ふと氣も進まずあれやこれやと眠れぬ数日を過ぎたが、何もしらぬ夫の家では部屋から結婚許可証をとったり披露宴のための品々をそろえるなどの準備が進められていたらしい。

あのとき親に従い広島が居住地というその結婚をしていたら、いま私は生きてはいなかったらう。

「お父さんの引刀のおかげで命拾ひよ」

私の言葉に息子と娘は、四十も半ばとなって白髪染めが難せず木にのれば足がふるえという父親をみて信じられない顔をする。

こうして紙一重の差でわが家が誕生したのだが、自分の体験からも結婚はかけにも似た冒険で、あとは二人の努力あるのみと思えてならない。

毎年、松の内もすぎたころご正忌の鐘が鳴りだすとどどらにうつろいだ夫と顔みあわせるのだが更に娘の誕生日ともかなり、成人の日を迎えて戸毎にひらめく日の丸の旗をみるのは嬉しいものだ。

新しい年を迎えてもうちではなかなか落ちついた平常のくらしに展れぬのは、いつもこんな思い出を懐しみながら私がついウキウキとこのひと月を過してしまふせいかもしれない。

(熊本市 主婦)

で迎え上げた。そして小学生徒だった作がよほど興味深かったと見え、かねてのヤンチャ坊主に似合わず、全く真剣な食い入る様に輝いた瞳で話を聞き入ったのを忘れぬ。

軍隊では、馬を活兵器として何より尊重した。愛馬心を徹底的にたたき込まれた私達でさえ全く頭が下る程、つかれた馬の脚を手入れし、鞍傷や肉がむき出しになっている背中をコップで手

——と。

あつちこち県庁、市町村役場等に立寄つた時のもすく威張つた奴がいると、この野郎、誰のお陰でメンを食つているのかとどなりたくなつた。と苦笑していた。虫の居所の悪い役人様が親切であらう筈はなかつた。

彼はこの壮行を記念して、去る六月十五日出発の折からシゲを伸ばし、鋭敏な記者は、カストロヒゲをたくいてくれた。まさに名言である。

その彼は真赤なジャンパーを着ていた。右と左と同居した感じ。右から左まで幅の広い人間なのかも知れない。

熊本を大いに売り込もうと考えた私は、県にねだつて肥後旅館でも贈つてもらおうかと考えた。無心したら前例がないからと断られた。前例のない行進に前例のあるう筈はなかつた。

熊本は道が悪いと悪口をたたいた。そしてガラスの靴が多いうちでチチった彼——ガラスが割れても捨てる人はいませんかねとも聞いた。彼は、八代、一勝地、人吉で温泉で県のはこりを洗い流して、やがて最良の正月を私達のなつかしい母校に迎える事であらう。

(県議金副議長)

愉快な男であった。

は手つとり早くデパートを選ぶが、デパートの買ひものは、便利だといふ以上に私には気軽なのが取り柄だ。小売店などちががてぶらぶらと売り場を歩きまわりながら、人に煩わされず商品を選らぶのが魅力なのである。

ところが洋服の売り場などになると、デパートでも必ずのように店員がつきま

「オーバーをお求めですか」から始まって

「どんな型がお好きですか」

「今年はダークな色が好まれます」  
と矢張り早やに話しかけてくる、こうなると私は金輪際モノをいわ

## 過剰サービス

山口白鶴

先ず第一が買い物、いくつかの買い物がある場合、わたしはち